

シンポジウム「日本中世思想史研究に明日はあるか」
平成卅年十月廿七日（土） 於早稲田大学早稲田キャンパス九号館五階第一会議室

今日の日本中世思想史研究

森 新之介

問題の所在	1
第一項 日本思想史学会の内と外	2
第二項 認知の歪みと言路不通	4
第三項 中世は宗教の時代か	6
第四項 粗雑な社会評論	8
結語と提言	10

問題の所在

- 15
- ・ 人文学界における研究者人口：減少傾向
 - ・ 日本全体の要因：①少子化
 - ② 研究職への就職難（ポストの削減、大学院生の増加）
 - ③ 非研究職への就職状況の改善（景気回復）
 - ↓ 「修士課程に在学しながら非研究職への就職活動をしよう」「どうせ同じく就職難なら研究職を目指そう」という大卒の減少
 - ↓ 「景気が再び悪化する前に非研究職に就こう」という大卒の増加
- 20
- ・ 日本中世思想史学界：やはり研究者人口が減少
 - ↓ ただし、同学界における研究者人口の減少：他学界より深刻で、特有の原因あり
 - ・ 同学界：他にも幾つか問題あり
- 25
- ・ 報告者：三年前、日本思想史学会の大会シンポジウムでコメント
 - ↓ コメント内容：翌年、会誌『日本思想史学』に掲載される
 - ・ 報告者：昨年、同学会を退会
 - cf. 拙文「私が日本思想史学会を退会した理由」（2017/11/05）<https://researchmap.jp/joqpuuezyv-2167846/>
- 30
- ・ 本報告：同学界の危険な現状を整理紹介
 - ↓ 明日について提言

第一項 日本思想史学会の内と外

- ・日本思想史学会：特殊な性格あり
 - ↓（私見）日本中世思想史学界の危険な現状：日本思想史学会に着目して分析すべき
- ※鈴木と船田：日本思想史学会の会員
- 5 森 …… 元会員
- 大塚と野上 …… 非会員
- 10 歴史学界や国文学界：学界規模が大きい
 - ↓ 複数の全国学会あり
- ex. 仏教文学会、説話文学会、中世文学会、和歌文学会など
- 15 日本思想史学会：年一回の会誌刊行（九月）と年一回の大会開催（十月）
- ・思想史研究者（限らず中世）：日本思想史学会だけで研究活動することは不可能
- ↓ 必ず他分野（歴史学や国文学など）の学会でも活動する必要がある
- ・思想史研究者の他分野学会への進出：多い
- ↓ ただし、他分野研究者（殊に中世）の日本思想史学会への加入：少ない
- 20 研究者がある学会に加入する理由：「研究発表すれば近隣分野の研究者が聴くと期待できる」
「論文が掲載されれば近隣分野の研究者が読むと期待できる」
- ・日本思想史学会の大会や会誌：中世思想史研究者の聴衆や読者が殆んど期待できない
- ↓ 多くの中世思想史研究者：加入しない
- ex.（某若手日本中世史研究者）「あそこは日本近代思想史学会でしょ」¹
- （某中堅中世国文学研究者）「たまに必要な論文が会誌に載ったらそこを複写すればよいだけ」²
- ・日本思想史学会の悪循環：「大会の聴衆や会誌の読者に中世思想史研究者が少ない」
 - ↓ 「中世思想史研究者が殆んど加入しない」
 - ↓ 「大会の聴衆や会誌の読者に中世思想史研究者が少ない」
- 30 、『日本思想史学』 「古代と中世の投稿論文は…引用者註」 減少傾向に歯止めがかからない」
（第三八号「2006」「編集後記」）
- ・『日本思想史学』の中世論文：一／二（2006） ↓ ○／四（2007） ↓ 一／一（2008）
 - ↓ 三／？（2009） ↓ ○／一（2010） ↓ 一／？（2011）
 - ↓ 一／？（2012） ↓ ○／一（2013） ↓ 三／三（2014）
 - ↓ 一／三（2015） ↓ ○／四（2016） ↓ ○／一（2017）
 - ↓ ○／？（2018）
- 35 ※分子は掲載本数、分母は投稿本数。「？」は不記載。古代から中世に跨ったものも算入

¹ 2011年五月、報告者との会食で語った言葉。

² 2015年八月、某所の懇親会で報告者に語った言葉。

5	・日本思想史学会大会の中世個別発表：二(2006) ↓ 二(2007) ↓ 五(2008)
	↓ 四(2009) ↓ 一(2010) ↓ 一(2011)
	↓ 五(2012) ↓ 三(2013) ↓ 三(2014)
	↓ 四(2015) ↓ 三(2016) ↓ 六(2017)
	↓ ○(2018、パネルセッションもなし)

- ・日本思想史学会の内と外：中世研究に質や量の差が生じる
- ・福島金治編『学芸と文芸』(『生活と文化の歴史学』九)、竹林舎、2016。
- ・福島金治「序「学芸と文芸」編集にあたって」

I 国家と家学

- 井原今朝男「中世国家の官人と学問——中世大学寮官人と積奠儀礼——」
- 永井 晋「鎌倉時代の文章道大業の家——勤める官職と活躍の場——」
- 菅原 正子「朝廷・公家の文庫——諸家本の所蔵と三条西家文庫——」
- 渡辺 滋「中世公家の「家学」の継承——九条家から一条家へ——」

II 和漢書の伝来と集積

- 久保木秀夫『本朝書籍目録』の伝本と分類」
- 陳 翀「慧萼鈔南禅院本白氏文集の巻数とその正統性について——日本伝来漢籍旧鈔本による原典籍の復元に関する一考察——」

- 高田 宗平『令集解』所引漢籍の性格に関する一断面——『論語義疏』を中心に——」
- 松本 大『原中最秘抄』の性格——行阿説への再検討を基点として——」

III 寺院と僧の学びの形

- 蓑輪 顕量「中世南都の教学と問答・談義」
- 武井 和人「室町期南都寺院における和書のひろがり」
- 鈴木 英之「中世における僧の外典学習——仮託文献の内典化と修学——」
- 住吉 朋彦「韻類書をめぐる断章——五山僧習学の一面——」

IV 伝授と新たな法の創生

- 西 弥生「真言密教の伝授・口伝と抄物・聞書」
- 館野 文昭「中世歌学秘伝と歌学書の創出と伝授——『和歌古今灌頂卷』『悦目抄』を中心に——」
- 西岡 芳文「式盤を用いる密教修法の成立と展開」
- 福島 金治「戦国期における兵法書の伝授と密教僧・修験者」

V 知識伝授の場と学習技法

- 渡辺麻里子「談義所における聖教と談義書の形成」
 - 高橋 悠介「称名寺の神祇書形成の一端」
 - 高津 孝「琉球における漢籍受容と漢文の学習」
 - 白井 純「キリシタン版の刊行と日本語学習」
- ↓同書への寄稿者における日本思想史学会会員：鈴木英之だけ(会員名簿などにより照合)

- ・日本思想史学会：日本中世思想史研究者の一部だけが会員に

↓ただし、その会員が中心となって講座や事典を編集することあり

ex. 荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編集委員

『日本思想史講座』五卷(ペリかん社、2012～15)
 荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・編集委員

『岩波講座日本の思想』八卷(岩波書店、2013～14)
 日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』(丸善出版、印刷中)

- 5
- ・(私見) 日本思想史の通史叙述：日本思想史学会(の会員) にとっての使命
↓ 同学会(の会員) へのみ可能かも知れない
 - ・日本思想史学会の外部での日本中世思想史研究：優れた個別研究も多い
↓ ただし、通史叙述に結実しない
 - ・日本思想史学会：「たかが日本思想史学会、されど日本思想史学会」

第二項 認知の歪みと言路不通

- 10
- ・日本思想史学界の危険な現状：日本思想史学会で必ずしも正しく認識されていない
 - 1. 拙文「両講座における中世思想史研究の課題」、『日本思想史学』四八、2016。
中世「思想史：引用者註」研究などは現在、極めて危険な状況にあると考えられるが、両講座(ぺりかん講座と岩波講座：同前)にそのような危機意識は見出されない。(二五頁)
 - 研究状況の停滞は、両講座の構成にも影を落としていないか。「…隣接諸学からの寄稿が多い両講座は華やかである。しかしこれは、思想史学での中世研究が停滞しているため自給率が低下し、隣接諸学からの輸入に依存して成り立っているとも見得る。(二五～六頁)

- 15
- ・(報告者) 中世思想史研究：極めて危険な状況
ぺりかん講座と岩波講座：隣接諸学からの輸入に依存
↓しかし、危機意識なし

- 20
- 2. 末木文美士「第四八号特集コメント記事への応答」、『日本思想史学』四九、2017。
森氏は「中世思想史研究は活発か」という問題を提起し、それに否定的な見方を示している。氏は、「日本思想史」という領域を閉じた自立的な領域と見ているようだが、私はその見方には反対で、日本思想史はもともと複合的な分野であり、単一の学会ですべてを網羅できず、多分野の成果を総合的に見ることが考えられる。(五二頁)

- 25
- ・(末木) 日本思想史：もともと複合的な分野
↓単一の学会ですべてを網羅できず、多分野の成果を総合的に見るべき

- 30
- ・末木：日本思想史学会の評議員
↓(比喩) 日本の国会議員：「日本は少子化かも知れないが世界全体としては少子化でない」と主張
(疑問) 日本中世思想史研究：(もし他学会で活発なら) 日本思想史学会で活発でなくてよいのか
() 活発でない同学会の問題を省察すべきでないか
 - ・日本思想史学会の重鎮たち(佐藤弘夫や末木文美士など)
…「顕密体制論により思想史学界の内外で中世研究が活発になった」と廿年以上も主張。
※首唱者は平雅行だが、同学会の会員でないため除外
↓(私見) 弊害：三つ生じた

3 拙稿「拙著『撰関院政期思想史研究』翼増三章——再び平雅行「破綻論」などに答う——」(『論叢アジアの文化と思想』一三三、2014、第三章「研究史における顕密体制論」) 参照。

・(弊害①)「顕密体制論により中世思想史研究は活発になった」という誤解…実状と乖離しながら定着
(報告者)「同論『顕密体制論…引用者註』の提唱によってその後の研究が如何に一変したかは、必ずしも判然としない」⁴

「従来、黒田俊雄が昭和五十年に顕密体制論を提唱したことで、それまで全く顧みられていなかった旧仏教の研究が勃興した、と語られることが多かった。しかし、このような通念は顕密体制論を過大評価したものだと考えられる。〔…〕顕密体制論への過大評価は、中世思想研究の減少や旧仏教研究の遅滞が隠蔽されるなどの弊害を生じた。同論によって研究が縦横無尽に展開したと高唱されれば、その恩恵に浴していない研究課題があるとは想像されず、不足を補おうとする問題意識も生じ難くなる」⁵

10 ↓(末木文美士)「この時代〔中世…引用者註〕の仏教思想に関しては、従来、いわゆる「鎌倉新仏教」を中心とする鎌倉新仏教中心史観が支配的であったが、1970年代の顕密体制論を転機に、大きく転換してきたことはすでに常識となっている」⁶

・報告者の「顕密体制論によって研究史は「変していない」という主張
〔2〕研究史として、森新之介『撰関院政期思想史研究』(思文閣出版、2013)第一章など」。

15 …末木により「顕密体制論によって研究史は「変した」という主張に援用される

・(弊害②)「顕密体制論に依拠すれば他分野との交流が活発になる」という誤解…生じ、広まった
↓しかし、歴史学や国文学における中世研究の盛況…×(顕密体制論のような)理論による

○(文献を調査分析する)技術や経験による

20 ・思想史学界…顕密体制論を過大評価

↓技術や経験を軽視

↓他分野での中世研究から孤立

3. 富島義幸「浄土教と密教——平安仏教の理解をめぐって——」、『日本歴史』七二八、2009。

25 求められるのは、それぞれの学問分野の自立である。学問の自立とは、研究対象を限定的・独占的にあつかうことではなく、また自らの問題意識に固執することでもない。それは自立でなく、孤立を生む。だからといって、それぞれの分野で見出された事象を、既存の有力な理論に無批判に当てはめればよいわけではない。今、諸学で共有すべきは理論ではなく事象である。個別の事象を、新たに描かれる全体史の一部として、真筆に受け止めることが求められよう。(六四頁)

30 ・(富島)それぞれの学問分野…自立すべき
諸学で共有すべきもの…×理論
○事象

35 ・報告者…富島の提言に賛同

・(弊害③)同学会の若手の中世研究者たち…中世研究の窮状を訴え難くなった

・若手の危機意識…広く共有されず

↓危険な現状の最大の原因…言路不通(現状の危険が広く認識されず、それを訴えることも憚られる)

⁴ 拙著『撰関院政期思想史研究』、思文閣出版、2013、三二頁。

⁵ 拙稿「拙著『撰関院政期思想史研究』翼増三章——再び平雅行「破綻論」などに答う——」、『論叢アジアの文化と思想』二二二、2014、五一〜二〇頁。

⁶ 末木文美士「思想／思想史／思想史学——二つの日本思想史講座と日本思想史の問い方——」、『日本思想史学』四八、2016、一六頁、後註二。

第三項 中世は宗教の時代か

- 4 末木文美士「総論」、苅部直など編集委員『中世』、『日本思想史講座』二〇、ぺりかん社、2012。
中世像は時代とともにさまざまな転変を示してきた。そこには、新しい史料による情報の増加ということもあるとともに、時代の変化に伴う見る側の意識や理想が託されていることが知られるであろう。中世研究は決して単純な客観研究ではなく、むしろ中世と現代という隔絶した時代の間の緊張であり、対話である。(一七頁)
- 5 蓑輪顕量「中世の仏教思想」は、中世思想のもつとも中核を形成する仏教を取り上げる。(二三頁)
近年の中世思想研究はきわめて進展が著しく、従来の常識はほぼ完全に転覆している。中世は黽臭い過去の遺物ではなく、生き生きとした思想がダイナミックに展開している時代である。近代が行き詰った今日、改めて中世を読み直すことは、喫緊の課題である。(二五〜六頁)

・(末木) 中世研究：×単純な客観研究

○中世と現代という隔絶した時代間の緊張、対話

仏教：中世思想のもつとも中核を形成

中世：黽臭い過去の遺物でない

近代：行き詰っている

↓喫緊の課題：改めて中世を読み直すこと

・(私見) 「近代が行き詰った今日、改めて中世を読み直す」という問題意識：黽臭い

- 20 5. 拙文「両講座における中世思想史研究の課題」、「日本思想史学」四八、2016。
末木は、ぺりかん講座中世巻の「総論」で「近年の中世思想研究はきわめて進展が著しく、従来の常識はほぼ完全に転覆している」(二五〜六頁)と述べた。しかし「：」同巻「総論」には、「中世思想のもつとも中核を形成する仏教」(二三頁)や「中世は武士の時代である」(二四頁)など、「従来の常識」を襲った表現も散見される。中世思想史で仏教や武士が重要であることは言うまでもないが、それらを中核や代表とするような通念は懐疑されるべきであろう。(二五頁)

- 25 思想史研究を今日に役立たせるといふ問題意識は、研究の幅を狭めることにもなりかねない。世俗の時代である近代を克服すべきだといふ問題意識で中世を研究すれば、宗教の時代としての一面だけが切り取られてしまう。研究者の問題意識は他人に言われて変えるようなものでないであろうが、そういった危険にも注意すべきである。(二七頁)

・(報告者) 末木：「従来の常識は近年の中世思想研究でほぼ完全に転覆」と主張

「中世は仏教と武士の時代」：温存された通念

↓懐疑すべき

- 35 「近代を克服すべきだ」といふ問題意識：中世の宗教を過大評価することに

・(通念) 古代：神祇、律令、陰陽道

中世：仏教、武家思想、芸道、天主教

近世：儒学、国学、蘭学

近代：洋学、神道、仏教

↓(私見) 通念：一部温存されている

6. 藤巻和宏「古典教育と宗教思想——中世は「宗教の時代」なのか?——」、松尾葦江編『ともに読む古典——中世文学編——』、笠間書院、2017。

中世は宗教の時代——。これは、中世という時代を「わかりやすく」説明する際の常套句でもある。動乱の時代、人々は救いを宗教に求め、現世をはかなむ無常観が浸透する。また、貴族文化が衰退し、新たに武士や僧侶が文化の担い手となり、そこから幽玄という美意識が興る。——このような紋切り型の言い回しで、なんとなく中世という時代がわかったような気になるのである。しかし、これは本当に中世という時代を言い当てているのだろうか。むしろ、現代に生きる我々の「中世とはかくあるべし」という願望が投影されているだけではないだろうか。(二四九～五〇頁)

10. (藤巻)「中世は宗教の時代」…常套句

↓中世という時代を分かったような気になる

↓しかし、現代人の願望が投影されているだけでないか

7. 船田淳一「中世宗教儀礼研究の現在」、『説話文学研究』五三、2018。

中世儀礼研究が宗教に傾斜するのは、近代的な世俗化論に対して近代に回収されない中世を見出すという志向性に起因している。1980年代後半以降、殊に顕著となったポストモダンの状況下の知は、「宗教の時代としての中世」の価値を発見したのであり、三〇年近く「中世ルネサンス」的な学界の空気が持続してきたと言えよう。(三〇頁)

〔森の…引用者註〕こうした発言は、「二三十年程続いてきた「中世ルネサンス」や「宗教儀礼研究」の成果が、審議される段階に至ったことを意味していると思われる〔…〕。中世宗教儀礼研究が、この辺りで役割を終え知のアーリーナを去るのではなく、セカンドステージの扉を開くためには、いま改めて中世宗教儀礼研究の総括が行われなくてはならないのだと感じている。(三二頁)

・(船田) 世俗化した近代に回収されない中世を見出すという志向…中世儀礼研究の宗教傾斜

↓「中世ルネサンス」

中世宗教儀礼研究…これまでの成果が審議される段階にある

・(私見) これまでの中世思想史学界…宗教を過大評価し、世俗を過小評価

↓世俗やそれと宗教の関係など…研究の余地が大きい

顕密体制論やコスモロジー論…中世(国家)宗教史についての学説

↓非宗教の思想(漢学など)を顧慮していない

漢学(漢唐注疏学)への低い関心…×顕密体制論だけの問題

○日本史や思想史など諸学界(除く国文学界)共通の問題

玉懸博之などによる日本中近世思想史研究…誰かが欠を補うべき

第四項 粗雑な社会評論

・社会評論…(私見)×研究者の本分

×社会からの需要

↓しかし、日本思想史学会の重鎮たち…社会評論を好む

5

8. 荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎「刊行にあたって」、同編『古代』、『日本思想史講座』一)、へりかん社、2012。

先の見えないこの危機と閉塞の時代に、この列島でなされてきた知の営みを集約し、未来への希望を託したささやかなメッセージとして国内外に発信したいというのが私たちの強い希望である。(三頁)

10

9. 荻部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士「編集にあたって」、同編『日本』と日本思想』、『岩波講座日本の思想』一)、岩波書店、2013。

本講座では、過去の思想と今日とが切り結ぶ問題を設定し、テーマごとにそれぞれの執筆者が論じる。思想の転変について精密に点検し、批判の節にかけることで、新たな角度からの光をあてたいと考えたからである。思想の蓄積を貴重な財産とし、未来にむけた思想を創り出すことができるだろう。(v頁)

15

・(五人の编者)「両講座…未来への希望を託したささやかなメッセージとして国内外に発信
未来に向けた思想を創り出した

20

・末木文美士…2011年、『中外日報』四月廿六日号で

東日本大震災について「天罰」として受け止め、謙虚に反省しなければいけない」と主張

↓高橋哲哉…『犠牲のシステム 福島・沖繩』(集英社、2012)で末木の天罰論を批判

↓末木…『現代仏教論』(新潮社、2012)などで反論、再論

25

10. 末木文美士『草木成仏の思想——安然と日本人の自然観——』、サンガ、2015。

自然の奥の「真」なるものへの畏れを取り戻すことの必要を説く私に対して、自然はあくまで自然として科学の問題であり、それを超えた力を認めるのはおかしいという批判ばかりが集中した。これはきわめて奇怪であるとともに、危険なことである。そのような思いから、拙著『現代仏教論』…引用者註)を出版した。世間はもはや震災のことなど関心をなくしてしまつたようで、拙著へもどこからも批判が出なかつた。原発問題を除けば、震災はもう過去のこととされてしまつたようだ。「絆」というような口当りのよい言葉だけが闊歩し、本質に触れる問題を避け、言葉を統制し、それどころか言葉狩りが横行し、被災地はできるだけそつと閉じ込めて語らないようにして、早く忘れようというのが、今日の日本の社会のやり方らしい。それは、戦争期に日本軍の大勝利ばかりが喧伝され、それへの危惧を表明することが許されなかつた時代に似ている。「日本を取り戻す」「強い日本を作る」という幻想が嘘であることをみんなが知りながら、それを口にするのと圧殺される。そんな時代がよい時代であるわけがない。戦争と自然破壊へ向けて、一直線に進んでいるようだ。「…」預言者の言葉は世に容れられることはないが、言うべきことは言わなければならない。

35

(一六七〜八頁)

40

・(末木)自然の奥の「真」なるものへの畏れ…取り戻すべき

↓自説への批判集中…奇怪、危険

次著『現代仏教論』…批判されず

↓今日の日本社会…戦争と自然破壊へ驀進

預言者…世に容れられなくても言うべきことは言う

・(私見) 末木の「自然の強さ大きさを畏れ、人間の弱さ小ささを忘れるな」という主張…理解できる
↓ただし、その主張に「冥」「天罰」などの語を用いること…理解できない
末木の天罰論…不健全

5 ↓しかし、日本思想史研究者からの批判なし
日本思想史学界…より不健全

11. 佐藤弘夫「文庫版刊行にあたって」(書き下ろし)、『「神国」日本——記紀から中世、そしてナショナリズムへ——』、講談社、2018(初刊2006)。

10 科学技術の暴走に加えて、近代社会が生み出したもう一つの産物が、排他的なウルトラ・ナショナリズムやヘイトスピーチにみられるような「心の劣化」ともいえるべき現象である。文明化の成熟は人間の理性の全面的な開花をもたらすものと考えられ、高いモラルを土台とする理想社会の誕生を予感させた。だが、現実がその方向に進むことはなかった。現在、日本と韓国・中国の間では、それぞれの境界に位置する小島の領有をめぐって激しい応酬が繰り返されている。近代に入る前の時代では、経済的価値のない無人島を「固有の領土」とした上で、その所有の正当性が主張されることはなかった。まして、為政者だけでなく国民を巻き込んだ激しい誹謗中傷合戦は皆無だった。いまわたしたちは、みずからが生み出した巨大にして醜悪な暗黒面の深淵を目の当たりにして、なすすべもなく呆然と佇んでいるのである。(二〇五〜六頁)

15 人文科学の究極の目的は、人間というこの不可解な存在の本質を解き明かすところにある。哲学・歴史学・文学といった学問分野は、いずれもこの課題に解答を提示することを最終的な目的としていたはずである。しかし、学問の本来の目標は忘れられ、個々の学問分野の維持そのものが目的化しているのが学界の現状である。こうした状況に対する問題意識が、「人文学の存在意義を問う声の背景にはある。21世紀に生きるわたしたちは、かつて近代の草創期に思想家たちが思い描いたような、直線的な進化の果てに生み出された理想社会にはいるのではない。近代化は人類にかつてない物質的な繁栄をもたらす一方で、人間の心に、昔の人が想像もしえなかったような無機質な領域を創り出した。いま世界中で問題になっているウルトラ・ナショナリズムや民族差別もそこから生まれた。原子力発電所の事故や環境汚染も、根本的な要因は人間の心の劣化にあると私は考えている。」

25 ・(佐藤) 人文学の究極の目的…人間という存在の本質の解明
人の心…劣化している

30 ↓ウルトラ・ナショナリズムや民族差別、原子力発電所の事故や環境汚染の原因に

・(疑問) 人の心…低劣でない時期があったか
↓「人間の心の劣化」…一つの歴史観でしかないのではないか
佐藤の文章…人文学の存在意義を反証していないか

35 ・(私見) 末木や佐藤の社会評論…黴臭い
↓若い世代に日本中世思想史研究を嫌厭させているかも知れない

結語と提言

- ・脱却すべきもの：「顕密体制論により思想史学界の内外で中世研究が活発になった」という神話
↓共有すべきもの：「日本中世思想史研究が現在、極めて危険な状況にある」という危機意識
- ・日本思想史（または日本中世思想史）の通史：叙述されるべき
↓ただし、現状：それどころでない

- ・思想史研究者：日本史や国文学に学び、取り入れるべきものを取り入れるべき
↓ただし、日本史や国文学に盲従すべきでない
- ・やり尽くされたと思われる研究対象：研究の余地あり
- 10 ex. 城福雅伸の「興福寺奏状」研究
報告者の末法思想、「興福寺奏状」、『愚管抄』研究など

- ・日本中世：×宗教の時代
↓日本中世思想史：×日本中世宗教史
- 15 ・世俗思想（漢学など）研究の開拓や拡充：必要
↓世俗思想と宗教思想の研究：融合されるべき
- ・思想史研究者による粗雑な社会評論：逆効果にもなる
↓他の思想史研究者：適宜それを批判すべき